

# ドイツ表現主義におけるフランス文学受容

松 尾 早 苗

**要旨：**ドイツでは19世紀末から、経済発展にともなってヨーロッパの近隣諸国、とくに隣国フランスの文化への関心が高まったが、本稿ではドイツ表現主義の作家がおもに同時代のフランス文学をどのように受容し、その影響を各々の創作にどのように反映したかを明らかにするために、次の観点から20世紀初頭以降、約20年間の独仏の文学関係を考察している。Ⅰ. 20世紀初頭の独仏の文学関係、Ⅱ. 表現主義の作家（ベン、ハイム、ベッヒャー、H・マン）のフランス憧憬とフランス賞賛、Ⅲ. 表現主義の文学に対するフランス文学の影響・作家別（アルチュール・ランボー、エミール・ヴェラレーン、ポール・クロデル、フランシス・ジャム、レオン・ドゥーベル、ヴォルテール）の分析、Ⅳ. 表現主義の雑誌（『シュトゥルム』誌、『アクツィオン』誌、『ノイエ・ブレッター』誌、『ヴァイセ・ブレッター』誌、『フォルム』誌、『フリーデ』誌、『ミュンヘン文芸』誌）におけるフランス作家の掲載状況、Ⅴ. 第一次世界大戦下の独仏の文学者の関係（シュタードラーとペギーの戦場での対峙：ポール・エリュアールとマックス・エルンストの友情：リルケを救ったSt・ツヴァイクとロマン・ロランの連携：Th・ドイブラーによるフランス詩集『おんどり』の編集・発行：M・マルティネとカール・オッテンの詩的呼びかけ：大戦中のスイスにおける独仏の文学活動。以上の考察から、ドイツ表現主義におけるフランス文学受容が、たんに文学作品の翻訳や翻案に留まらず、（第一次大戦中のスイスで行われたような）独仏の文学者の創造的な相互作用と共同活動へと発展し、表現主義が汎ヨーロッパの特徴を得る契機になったことを明らかにしている。

## Ⅰ. 20世紀初頭の独仏の文学関係

20世紀初頭の独仏関係をみると、フランスでは普仏戦争の敗北とアルザス＝ロレーヌの割譲の結果、ドイツに敵対感情を抱く集団が生まれ、それはフランスの知識人にも影響を及ぼさずにはいなかった。まず、モーリス・バレス（1862-1923）とポール・デルレーード（1846-1914）の集団がいた。前者は1889年に右翼陣営の論客として代議士になり、国家主義を振りかざし、フランスの伝統的価値を擁護する立場を主張した。後者は愛国的な作品を発表して国粹主義の思想を鼓吹し、反独右翼運動を指導した。このほかにも「ヴォージュ山脈の青い稜線を眺め続けた」愛国的集団が存在した。ドイツへの報復的な態度はその後、長年にわたって変わることなく、第一次大戦終結後もなお認めることができた。

しかし、ドイツではこれと対照的で、とくに知識人の多くは親仏的と言えた。ゲオルゲ（1868-1933）、デーメル（1863-1920）、リルケ（1875-1926）、ホーフマンスタール（1874-1929）などはフランス語が堪能で、フランス文化についても豊かな知識を持っていた。実際、彼らはフランス語の練習としてであれ、ドイツ語でよりもフランス語で表現するほうが相応しいと思った事柄はしばしばフランス語で書いていた。長年パリで暮らしたリルケは『果樹園』、『薔薇』、『フランス語詩集』など、数冊の詩集をフランス語で出版していた。また、ゲオルゲもフラン

ス語で詩を書いたことがあり、それは「外国語詩」(Gedichte in fremden Sprachen)として彼の創作に多様性をもたらしていた<sup>1)</sup>。さらに、彼らの多くは頻繁にフランスを訪れたり、長期間フランスに暮らしたことがあった。こうしたフランスとの関係は、いわば伝統のようにその後の世代の文学者にも引き継がれた。

St・ツヴァイク (1881-1942)、ハインリヒ (1871-1950) と トーマス (1875-1955) のマン兄弟、ベン (1886-1956)<sup>2)</sup> などは実に巧みにフランス語で書くことができた。こうした優れたフランス語能力は、A・ヴォルフエンシュタイン (1883-1945)、P・ツェヒ (1881-1946)、H・ヤーコプ (1896-1961)、Fr・ハルデコップフ (1876-1954) など精力的にフランス文学を翻訳していた表現主義の作家には言うに及ばないことであった。

これに対して、フランスの作家が長期間ドイツを訪れたり、ドイツに暮らしたりすることは稀で、せいぜい短期間の旅行をする程度だった。また彼らは、少数の例外を除いて、数行のドイツ語も書くことができなかったといわれている。

相手の文化に対するこの独仏の文学者の関心の落差は、当時のフランス人が抱いたドイツの影響への懸念にも起因していたように思われる。それゆえに、デーメルは1911年9月末に雑誌『努力』(L'Effort)が行ったアンケートに「そうした防御を本当に必要とするなら、貴国の文化は脆弱な基盤に立っているということです。強い国は外国の勢力と手を携えても何も失わず、その反対にそこから益を得るものです。教養あるヨーロッパ人はみな自分がフランス精神に負っている物を知っている。しかし、いかに豊かな精神といえども、他に与えるのみで他から受け容れようとせねば、貧弱になる以外にないのです」<sup>3)</sup>と記したのである。

その当時のドイツの雑誌は躊躇うこともなくフランス語を掲載していた。それどころか、あの『バーン』誌は全文フランス語の付録を発行していた<sup>4)</sup>。こうした状況は20世紀初頭のフランスでは考えられないことであった。ロマン・ロランは例外的存在であったかもしれない。しかし、彼は何よりもまずヨーロッパ人であり、とくに親独家というわけではなかった。また、ベルギーの詩人ヴェラーレン(フラマン語読みはヴェルハーレン)も(少なくとも第一次大戦勃発までは)例外の一人だったと言える。St・ツヴァイク、ヴェラーレン、リルケ、ロラン、バザルジェットが寄せ書きした一枚の葉書<sup>5)</sup>は、独仏の作家の友好関係の数少ない例だったかもしれない。

独仏における相互の文化受容の不均衡は、そのまま翻訳活動にも表れていた。後に詳しく述べるが、フランス文学のドイツ語への翻訳は、Fr・ブライ<sup>6)</sup>、K・L・アマー(本名カール・クラマー)、St・ツヴァイクなど優れた翻訳者によって、象徴主義の作家からヴェラーレン、クロード、ジッドに及ぶまで数多く行われた。これに対してフランスでは、アンリ・アルベールによるニーチェの著作の翻訳以外に思い浮かぶものがない。この不均衡は、その後の表現主義の時代にも基本的には変わらなかった。

## II. 表現主義の作家のフランス憧憬

ハインリヒ・マンはかつて「フランスはヨーロッパ人の第二の故郷である」と語ったが、この言葉はドイツ表現主義の多くの作家にも当てはまっていた。彼らにとって、フランス的なもののすべてに備わる知性の輝きは魅力的で、つねに意義深いものに思われた。表現主義の多くの詩人には、以下の例に見られるように、フランスへの強い憧憬、深い関心がすでに早い時期に

芽生えていた。

a) ゴットフリート・ベンは青年期を回想して「私の世代はフランスの魅力と偉大さをとくに強く感じ取った世代であった。フランスはニーチェを通じてスタンダールやフロバールで我々に影響を及ぼし、ゲオルゲを通じてボードレールやヴェルレーヌで我々に働きかけてきた。最近の数十年には印象主義もそれに加わった。大戦直前には、我々はクロード・ロッセとジッダ、ベルクソンとシュアレスを読んだ。フランスからやってきたのは偉大な精神であった」<sup>7)</sup>と語っていた。

このベンの回想からは、20世紀初頭に哲学者や詩人を通じてフランス文学の受容が盛んに行われていた様子が窺える。ちなみに、ニーチェはフランス文化に対して概して好意的で、関心も強かったので、著作でフランスの作家や哲学者を論じることが少なくなかった。そして、表現主義の詩人たちはニーチェを愛読したことで、ニーチェが言及し、論じたフランスの作家たちを知るようになり、ニーチェから間接的にフランス文化を捉える結果になった。

次に、ゲオルゲは、フランス文学に熱心に取り組んでいた（ヴォルフスケールやL・クラゲスなどの）青年を彼の文学集団に加えていたのみならず、既刊のフランス詩集や『芸術草紙』に掲載されたフランス詩を自ら多数翻訳し、フランス文学を広くドイツに紹介した先駆的詩人であった。それゆえに、後年の表現主義の詩人たちがたとえゲオルゲの象徴主義的美学に反発したにせよ<sup>8)</sup>、彼らがボードレールやランボーといった詩人を知ったのは、ゲオルゲのおかげであると言える。ゲオルゲは1901年に『悪の華』を翻案したほか、多くのフランス象徴主義の詩を（ドイツでほとんど最初に）翻訳した。彼が編集した『現代の詩人たち』（Zeitgenössische Dichter. Berlin, Georg Bondi, 1905）はイギリス、デンマーク、オランダ、ベルギー、フランス、イタリア、ポーランドの同時代の詩の独訳を収めていたが、フランスからはヴェルレーヌ、マラルメ、ランボー、アンリ・ド・レニエの合計30篇の詩<sup>9)</sup>を収めていた。

b) ゲオルク・ハイム（1887-1912）はフランスの歴史、文化に強い関心を抱き、とくにフランス革命やパリ・コミュンを主題にした作品をいくつか書いた。たとえば、詩には「バステューユ」、「ダントン」、「ロベスピエール」、「フランソワ・ヴィヨン」を詠った作品が、そして戯曲には『バステューユ襲撃』（1908）、『フランス革命』（1908）、『ルイ十六世』（1910）を主題にした作品がある。

そして、ハイムは日記で「多くの人に崇拜されず、（自分と同様に）しばしば自己に失望する詩人の一人」である「ランボーを好む」と告白したり、時には「ボードレール、ヴェルレーヌ、ランボー……。これらの詩聖にドイツ人で（憂鬱と自信喪失に行き詰まることなく）匹敵するのは自分のみだ」<sup>10)</sup>と自負していた。さらに、スタンダールについては「彼は、冷笑的で向こう見ずな人間から見れば、逆説を心理学的に理解できないサロン人間に道徳的憤慨をもたらした作家であった。だが、実際は、彼は生涯を通じてきわめて繊細な感情の持ち主で、ほろ苦い自己満足で鎮まったかと思うとすぐに高揚するような情熱を秘めた作家だった」<sup>11)</sup>と述べ、『赤と黒』の数箇所を書き抜いていた。

こうしたフランスへの関心と憧憬の根本には、彼特有の夢想的なフランス像が息衝いていた。ほぼ同時期の1911年2月に書かれた「パリ憧憬」と題する詩では、「かの紋章の王家の百合の白色にも／似たフランスの夕闇をぬって／昼間の太陽が蜂蜜のごとく甘美に／黄金の空に消え入るとき／モンマルトルからはあまたの鐘が／鳴り響き、夕日の黄金の光輝を出迎える／ゆかしき麗人の巻き毛の上では／紅色の雲が婚礼の冠のごとく燃え輝く。／春なかば、秋なかば悲

哀の香に満ちた／風を胸に吸い込む者は／ノートルダムの塔が光輝を放つとき／おまえを想い焦がれて病床に伏す。／芸術の都、すべてに偉大な母なるパリ…」<sup>12)</sup> と極度に美化されたパリへの熱い想いが詠われていた。

このフランス賛美に対して、ハイムはヴィルヘルム二世治下のドイツについては「とにかく何か起こらねば…。いつかもう一度バリエードが築かれるなら、私はその上に立つ最初の者であるだろう。我々は何という痛ましい政府を持っていることだろう。何という皇帝だろう。どこのサーカスに出ても立派に道化が務まるだろう。そして、政治家たちも国民の信頼を担えるところではない」<sup>13)</sup> と不満を託っていた。それゆえに、ハイムの場合、フランスはヴィルヘルム二世治下のドイツの反対像（Gegenbild）として憧憬されていたと言える。

c) ヨハネス・R・ベッヒャー（1891-1958）が1913年から1915年までに書いた詩のなかには「ボードレール」、「ランボー」、「ラ・マルセイユーズ」、「ゾラに捧ぐ」と題した詩がある。ちなみに、詩「ボードレール」では、ボードレールを「我を忘れて私が抱きしめる兄弟／現代の災禍のなかに立つ偉大な幽霊」と詠い、彼を「同胞」および「救世主」と称えている。そして、詩「ランボー」では、「暗い運命が我々全員に降りかかった／我々には何も与えられなかった／我々は屋根の氷河の上で絶望に身をよじる／きみは導きの綱で我々を救い出す」と詠われ、ボードレールと同様にランボーも「混迷の現状から民衆を救う」人道主義的な詩人として捉えられている。さらに、詩「ゾラに捧ぐ」では、ドレフュス事件で示されたゾラの行動的精神を賞賛し、文学者の社会的使命の基本として「ゾラ：いかに小さな夢であろうと、我々を駆り立て前方へ突進させる／おお、作品の三位一体：体験＝表現＝行動」と詠われ、ベッヒャーの文学の行動主義的な目標が表明されていた。

ベッヒャーの場合、フランスの文学者に対する深い尊敬の念は、彼が暮らすドイツへの強い不満と対照を成していた。実際、それらの詩とほぼ同じ時期に書かれた詩「ドイツ」では、「自分をドイツ人と認めること、そして／フランスの麗しさ、我々のバラ色の／幼年期の夢であるパリを憧憬せぬこと／それは困難だろう。我々は寒い四角の国に暮らしている」<sup>14)</sup> という詩節が三度も繰り返され、不満を鳴り響かせていた。

d) ハインリヒ・マンのフランス賞賛はハイムやベッヒャーの場合とはいくらか異なり、民主主義が根付き、文学者が「精神と行動の統一」を体現しているフランス社会への憧憬に基づいていた。H・マンは早くから「ヴィクトル・ユゴー」、「アナトール・フランス」、「ラクロ」、「フロベール」、「ジョルジュ・サンド」、「スタンダール」などに関する評論を発表し、フランス精神の研究に努めたために、「私が多少とも身につけた教養は、私の故国と、もう一つの模範となる国との半々に分かれている」と語っていた。

そして、彼のフランス評価はやがて行動主義の要請に基づいて、ヴィルヘルム二世治下のドイツの対極に立つ民主主義のフランスという明確な像を結ぶようになった。評論「ヴォルテール——ゲーテ」（1910年）では、仏独を代表する二人の作家を取り上げ、ヴォルテールを行動的知性ゆえにゲーテより高く評価した。また、評論「精神と行動」（1911年）では、「生が精神のもとで確かな歩みを続けているがゆえに、精神が生そのものとなっている」フランスを「精神に従って生活を作り上げる造形的な才能の欠如した」ドイツにとっての「模範」として讃えた。このようなH・マンのフランス賞賛は、大戦中の1915年に発表された「ゾラ論」でもさらに高められていた。

### Ⅲ. 表現主義におけるフランス文学受容

表現主義の詩人たちがフランス文学を知る上で、先人の行った紹介や翻訳は少なからぬ影響を及ぼした。たとえば、1906年に発行された『アメシスト』誌は、Fr・ブライヤ・K・L・アマーが訳したヴィヨン、ヴェルレーヌ、コルビエール、クロードル、ランボーなどの詩を数々掲載していたが<sup>15)</sup>、それらが1885年前後に生まれた表現主義の詩人たちに何の興味も抱かせなかったとは考えられない。

以下では、表現主義の詩人たちが青年期に出会い、各々の文学活動の糧としたフランス作家を取り上げ、その受容の実態をみてみたい。

a) アルチュール・ランボー (1854-1891) は表現主義の詩人たちにボードレールよりも高い関心を抱かれた。ランボーの作品は上述の『アメシスト』誌に『酩酊船』が掲載されたほか、St・ツヴァイクやK・L・アマー、ドイブラー、ツェヒ、ヴォルフエンシュタインなどによって訳された詩が数多く紹介された。

ゲオルク・トラークル (1887-1914) がランボーの作品と本格的に取り組んだのは、K・L・アマーの翻訳した『ランボー詩集』と出会い、その訳詩集から文学活動全般にわたる影響を受けた1908年秋のウィーン滞在以後だったと言われている。B・ベシェンシュタイン<sup>16)</sup>などの研究によれば、トラークルは少年期から(アルザス人家庭教師によって)フランス語に馴染んでいたが、彼のランボー受容はフランス語原詩からではなく、オーストリアの仏文研究者K・L・アマーの翻訳に拠っていたとされる。ちなみに、ランボーの詩はそれ以前にも『インゼル』誌などの文芸誌にK・L・アマーの訳で何篇か掲載されていた。1907年にインゼル出版社から刊行されたその訳詩集にはSt・ツヴァイクが書いた「ランボーの生涯と作品」も収められ、当時、ドイツ語圏の国で多く読まれたという。それ以後も表現主義の詩人たちのランボーへの関心は衰えることがなく、さまざまなランボー紹介が試みられた。

たとえば、Th・ドイブラー (1876-1934) はK・L・アマー訳の『ランボー詩集』に満足できなかったために、詩「皇帝の怒り」を訳してインゼル出版社に送り、さらにその訳を彼が編集した詩集『おんどり』(1917年)にも収めた。これはドイブラーのランボーへの関心の強さを物語る逸話であるが、彼はその後も『酩酊船』を初めランボーの作品をいくつか翻訳した。

また、P・ツェヒは1924年に『酩酊船』の表題でランボーの生涯を上演用のバラードで描いたが、彼はまた『イリュミネーション』なども翻訳し、1927年には自らの自由訳による『ランボー全集』を上梓した。

そして、ヴォルフエンシュタインも1930年に『アルチュール・ランボー：生涯・作品・書簡』を著したが、そこではランボーのほぼ全作品が紹介されていた。彼の場合、ランボー受容はとくに表現主義の文学研究と関連していたので、「表現主義の詩人に見られた熱狂的な叫びはランボーにも表れていた。そのほか、たとえばハイムに見られた、集团的描写による単調な大都市の光景もランボーに先例を見ることができた」<sup>17)</sup>などと分析していた。

さらに、チューリヒ=ダダの旗手H・バル (1886-1927) は1916年の日記で「我々の星にアルチュール・ランボーの名が欠けることがあってはならない。我々は、知らずして、欲せずして、ランボー主義者である。彼は我々のさまざまな姿勢や多感な逃避行の守護者であり、現代の美的荒廃状態の星である。ランボーは二つの部分に分かれる。詩人であり、手に負えぬ反抗者である。そして、後者の方に圧倒的な意義がある」<sup>18)</sup>と語っていた。

b) エミール・ヴェラーレン（1855-1916）ほど、1920 年以前のドイツの前衛的文学集団で愛読された詩人はいなかった。彼はやがてフランス語圏の国では忘れられてしまったが、ドイツ表現主義には長い間、影響を及ぼした。ベッヒャーからシュタードラーに至るまで何人もの詩人がヴェラーレンのとくに言語使用と表現技法を学び取った。

St・ツヴァイクは1902年にブリュッセルで初めてヴェラーレンに会って以来、ドイツにおけるヴェラーレンの熱心な紹介者になった。彼は早くも1902年にヴェラーレンの作品を翻訳する計画を立て、その後、精力的にヴェラーレン研究に取り組んだ結果、まず1910年に著書『エミール・ヴェラーレン』、翻案『ヴェラーレン詩選集』、『ヴェラーレン三戯曲』を出版し、この成果によって彼の名前は当時のドイツでヴェラーレンと深く結びつくことになった。無論、ツヴァイクはヴェラーレンの最初の紹介者ではなく、彼より早く1905年にヨハネス・シュラーフがヴェラーレンに関する本を出していた。また、ゲオルゲも先述の『同時代の詩』でヴェラーレンの訳詩を数篇発表していた。しかし、それらの紹介はツヴァイクの影響には及ばなかった。ツヴァイクの著書はドイツで出版されると、たちまち同年にフランス語に翻訳され、メルキュール・ド・フランス社から発行された。その著書の成功によって、ヴェラーレンはドイツで多くの読者を獲得し、よく知られる作家となり、ドイツ文化の一面に位置することができた。ドイツ現代詩の主要な主題の一つ、とくに生の肯定、生の賛美はヴェラーレンの影響に拠るといわれている<sup>19)</sup>。ヴェラーレンがドイツでいかに関心を集めていたかは、1912年に行われた彼のドイツ講演旅行の成功のみならず、『ヘレナの帰郷』がパリに先立ってベルリンでマックス・ラインハルトによって上演された事実によっても明らかである。

c) ボール・クロードル（1868-1955）の作品はかなり早い時期にドイツ語に翻訳されたが、その際、『交換』が『ヒューペリオン』誌に掲載後に本として出版されたように、一つの作品が何度も繰り返して翻訳、紹介されることがしばしばあった。

ドイツにおけるクロードルの作品の翻訳や紹介にはヤーコブ・ヘーグナー(1882-1962)が大きな役割を果たしていた。ヘーグナーはヘレラウで出版業を営むかたわら、おもに現代フランスのカトリックの作家の紹介に努め、とくにクロードルの作品を数多く翻訳していた。ヴィリ・ハースは当時を回想して「私は、ヘレラウにいる友人ヘーグナーによって、クロードルのいくつかの作品を読ませてもらった。彼の青年期の作品『真昼に分かつ』、新作『マリアへのお告げ』、とくにそれ以前の二つの戯曲『黄金の頭』と『七日目の休息』とであった。それらの作品を私は息もつかずに読んだ。その大部分はヘーグナー自身が優れた翻訳をしていた」<sup>20)</sup>と語っていた。

ちなみに、ヘーグナー訳の『マリアへのお告げ』は当時、大きな反響を呼び、それがヘレラウで1913年の第2回ダルクローズ学校祭の折に上演されたときは、Th・マン、リルケを初め、多くの作家や芸術家がそこを訪れた<sup>21)</sup>。たとえば、H・バルは「ヘレラウでクロードルの『マリアへのお告げ』を観、当時まだ新進のフランスの詩人であり、領事であったクロードルについてのヘーグナーの特別講演を非公開の席で聴いた。ヘーグナーはクロードルの翻訳者であると同時にその発行者でもあり、彼以上に深い尊敬と確かな知識を持ってクロードルを語ることのできる者はほかにいなかった」<sup>22)</sup>と述べた。

ヘーグナーについてはドイツの百科事典にも記載がないことが多く、彼の行った文化活動もあまり知られていない。しかし、ヘレラウでの翻訳や出版活動は、ヨーロッパ、とくに独仏の文化交流の発展に少なからぬ貢献をしたので、彼の功績が今後、広く紹介されることが望まれ

る。たとえば、彼は表現主義の文学=哲学的雑誌『新<sup>ノイエ・ブレッター</sup>草紙』の発行人を務めていた1912年に、同時代のフランスの知性の紹介に尽力し、クロードルのほかベルクソン、ジャム、ペギー、シュアレスなどを自らの翻訳でその雑誌に掲載していた。

そして、1913年にはカール・アインシュタイン（1885-1940）が『ヴァイセ・ブレッター』誌に「ポール・クロードル論」を発表したが、そこではクロードルの文学的特徴がマラルメ、ジッド、ランボーとの対比によって鮮やかに描き出されていた。

d) フランシス・ジャム（1868-1938）の文学世界は深い抒情性とキリスト教信仰に貫かれた宗教性に満ちており、表現主義の詩人たちによく見られた熱狂や暗い幻想とは共通する点がないように思われているが、シュタードラーはジャムの『十四の祈り』と『さまざまな詩』のほか、『恭順の祈り』を翻訳した。とくに『恭順の祈り』は表現主義の代表的叢書『最新の日』に収められて好評を博し、1917年に第2版、1920年に第3版、1921年に特別版が発行された。また、1916年にはヘグナーの翻訳で『野うさぎ物語』が出版されたが、この訳書は『シュトゥルム』誌の代表的詩人Fr・R・バーレンス（1895-1977）が21歳の従軍中に塹壕のなかで愛読した本として知られる。さらに1918年には、叢書「最新の日」の第58／59巻にジャムの『楽園（物語と考察）』がE・A・ラインハルトの翻訳で収められた。

このようにジャムの作品が表現主義の詩人たちの関心を得たことはやや意外に思われるかもしれない。しかし、ジャムの自由詩に近い詩形式や詩と散文の融合を図った自然詩は訳者のシュタードラーの詩作にも影響を及ぼしたと言われ、とくに「Gebet, …」で始まる『十四の祈り』はシュタードラーの長行詩にその痕跡を見ることができる<sup>23)</sup>。実際、ジャムは表現主義の詩人たちの反対象として、つまり彼らを補完する詩的存在として受容された面もあり、この点にも表現主義の文学の多様性を窺い知ることができる。

e) レオン・ドゥーベル（1879-1913）については主要な文学事典にも記載がなく、その生涯と作品もほとんど知られていない。しかし、表現主義の詩人たちはこのフランスの稀有な詩人に少なからぬ関心を抱き、彼の詩を雑誌などで紹介していた。

早くも1912年に、表現主義の詩人で出版人のA・R・マイヤーは彼が発行する叢書『抒情詩のビラ』の第19巻でドゥーベルの詩集『ほかのところで』（Ailleurs）をフランス語原文で発行した。これに対してドゥーベルは「私は、数頁ではなく主要な詩集によって人々に評価され得る点に到達しました。その詩集はドイツで私の詩人像を示すのに役立つでしょう。私にはそれで十分です。＜抒情詩のビラ＞に収められることを貴殿に感謝します。私は自分のあまりに辛い人生に失望しており、かろうじてペンを執ることができるのみです」<sup>24)</sup>とマイヤーに書き送った。

ドゥーベルが1913年6月12日にマルヌ川で投身自殺したあと、A・R・マイヤーは1913年9月1日発行の『マイアンドロス叢書』<sup>25)</sup>第6巻を「レオン・ドゥーベル追悼号」（Immemoriam Léon Deubel）にした。そこには、R・レーオンハルト、Fr・M・カーエン、A・R・マイヤーによって翻訳されたドゥーベルの詩13篇に続いて、ルイ・ペルゴー、グレーグ、G・デュアメル、レオン・ボケ、ヴィルドラック、H・ギルボウなどドゥーベルと親交があった作家たちによる追悼文や批評が収められていた。また、同巻の付録（Beiblatt）にも、彼の詩を翻訳した表現主義の詩人Fr・M・カーエンの書いたエッセイ「パリの詩人」が掲載されていた。

ドゥーベルの詩は『マイアンドロス叢書』以外にも、『アクツィオン』誌・第3巻（1913年）に4篇、『新芸術』誌・第1号（1913年）に5篇、『新パートス』誌・第1（1913年）、第2巻

（1914年）に10篇掲載された。そして、1914年にはP・ツェヒによってドゥーベルのソネット8篇の翻案『赤光の走った夜』が出版された。

表現主義の詩人たちがドゥーベルに関心を抱いた理由の一つには、彼の孤高の存在のみならず、「あまりに辛い人生への失望」という実存の危機への共感があったように思われる。つまり、ドゥーベルもまた「呪われた詩人」であるという表現主義の詩人たちの認識が彼らの心をとらえたのである。ドゥーベルが崇拝したヴェルレーヌは評論集『呪われた詩人たち』（1884年）で彼自身のほか、ランボー、マラルメなど「世に理解されない詩人たち」の肖像を描いていたが、表現主義の詩人たちには彼らと同様にドゥーベルもその系譜に入る詩人と捉えられたのである。実際、ドゥーベルの私家版『内面のソネット』（1903年）では「呪われた詩人たち」の項目で「ランボー」、「ヴェルレーヌ」、「ラフォルグ」と題する3篇のソネットが詠われていたが、ドゥーベルがそれらの詩人に自分を重ね合わせていたことは明らかであった<sup>26)</sup>。

f) ヴォルテールへの関心、とくに小説『カンディード』への興味は表現主義の世代に顕著であった。この理由には、その小説の主人公が戦争、海難、大地震、殺人、処刑など、この世のあらゆる苦難と災禍を体験していたこと、また悪が善に勝するという社会の矛盾・不条理が表現主義の詩人たちの現実認識と合致していたことが考えられた。

実際、『カンディード』の独訳版は1913年から1922年までの間に五種類もそれぞれ著名な画家の図版や挿絵を付して大手出版社から発行された。無論、その傾向にはその小説への興味のみならず、ヴォルテールの知性への関心も強く影響していたと思われる。たとえば、シッケレは早くも1905年に哲学的無神論と放蕩無頼の側面から描いたヴォルテール評伝を発表していた<sup>27)</sup>。

そして、行動主義の旗手H・マンも評論『ヴォルテール——ゲート』で「フランスの民主主義の詩人たちすべての心に繰り返し甦って来るのはヴォルテールである。…彼は埃にまみれながら人類のために戦う。…彼はあらゆる因習的なもの、思考や批判の矢を避けようとする無意識に生じたものを憎む。…真理が利害に抗し、精神が権力に立ち向かうとき、彼の名は鳴り響いた」と賞賛していた。

さらに、第一次大戦中の1916年にH・バルは「芸術上の問題を自由に話し合うための中心点を作り出す」目的でヴォルテールの名を冠したカバレーをチュエリヒに開設し、「若い芸術家と文学者の仲間ゲゼルシャフトの会」を立ち上げた。そして、そこでは「フランスの夕べソワレ」と称してアポリネール、M・ジャコブ、A・サルモン、A・ジャリ、ラフォルグ、ランボーなどの作品朗読が盛んに行われた。

#### IV. 表現主義の雑誌とフランスの作家

Paul Raabe (Hrsg.): Index Expressionismus. Bibliographie der Beiträge in den Zeitschriften und Jahrbüchern des literarischen Expressionismus 1910-1925, Serie A in 4 Teilen, 1972に拠れば、おもな表現主義の雑誌におけるフランスの作家の掲載状況は【資料1】、【資料2】のようであった。以下では、フランスの作家の掲載が比較的多い7誌を取り上げ、その主要な寄稿を紹介したい。



## 【資料 1】表現主義の雑誌、年報、アンソロジー、作品集におけるフランス作家の掲載状況

	Der Sturm	Die Aktion	Neue Blätter	Die Weissen Blätter	Das Forum	Der Friede	Münchener Blätter für Dichtung u. Graphik	その他
Alain 10		1		3		6		
Apollinaire 13	8							Die Bücherei Maiandros 3, Cabaret Voltaire 1, Der Mistral 1
Barbusse 18		1		3	4	2		Die Bücherkiste 1, Die Flöte 5, Menschen 1, Der Schrey 1
Baudelaire 21		6					3	Aufschwung 1, Der Brenner 1, Das Dachstube 1, Das Hohe Ufer 1, Phaeton 1, Pan 1, Sirius 1, Der Zweemann 4
Cendrars 12	7	3						Cabaret Voltaire 1, Revolution 1
Claudel 24	1	1	7	1		3	1	Aufschwung 1, Daimon 3, Die Freude 1, Herder-Blätter 1, Das Hohe Ufer 2, Sirius 1, Der Sturmreiter 1
Deubel 32		4						Die Bücherei Maiandros 13, Die Neue Kunst 5, Das Neue Pathos 10
Duhamel 5				3		1		Die Bücherei Maiandros 1
Flaubert 14	1	3			5		1	Pan 4
France 11		1			4	2		Genius 1, Menschen 1, Pan 1, Das Tribunal 1
Gide 6		4				1		Aufschwung 1
Guilbeaux 11						1	1	Die Bücherei Maiandros 1, Die Erde 8
Hello 6	1	1	2			1		Der Brenner 1
Jammes 55		9	9	15		7		Der Anbruch 1, Die Bücherei Maiandros 2, Daimon 3, Die Freude 1, Das Hohe Ufer 3, Die Neue Literatur 1, Der Zweemann 1, Der Orkan 1, Das Tribunal 1, Der Schrey 1
Laforge 14	9	3		1				Herder-Blätter 1
Marinetti 15	8	4						Die Bücherei Maiandros 1, Cabaret Voltaire 1, Der Mistral 1
Péguy 10		6	1					Der Brenner 1, Die Neue Schaubühne 1, Saturn 1
Philippe 7		1	1			1		Die Argonauten 1, Genius 3
Rimbaud 23	4	1		1			7	Aufschwung 1, Das Neue Pathos 1, Die Neue Schaubühne 1, Die Rettung 4, Romantik 1, Der Ventilator 2
Rivière 7	6		1					
Rolland 22				2	14	2		Genius 1, Das Hohe Ufer 1, Konstanz 1, Die Sichel 1
Schwob 5	1	1				2		Die Neue Literatur 1
Suarès 18		6	4	4		1		Daimon 1, Die Neue Kunst 1, Summa 1
Verhaeren 25		10	1	6				Die Bücherkiste 1, Das Neue Pathos 4, Pan 1, Der Ruf 1, Der Zweemann 1
Verlaine 15		4		6		2		Der Feuerreiter 2, Menschen 1

【資料2】ダダの雑誌におけるフランス作家の掲載状況

	Der Sturm (1922—)	Dada	Die Schamade	備考
Aragon 8	2	5	1	掲載作品のジャンルは詩が多い
Breton 6	2	3	1	掲載作品は短篇と詩
Eluard 8	4	2	2	掲載作品のジャンルは詩が多い
Ribémont=Dessaignes 7	3	3	1	
Soupault 8	3	4	1	掲載作品は短篇と詩
Tzara 57	7	28	7	Die Büchekiste 3, Cabaret Voltaire 5, Der Zeltweg 7

a) 『シュトゥルム』誌 (Der Sturm)

1910年にH・ヴァルデンが編集人となって創刊したこの雑誌は、『アクツィオン』誌とともに当時の文学、美術、音楽の領域での新しい芸術運動を推進した。この雑誌の意義と使命は、1918年に書かれた広告文にも「＜シュトゥルム＞誌はどの巻もドイツおよびヨーロッパの精神史のもっとも重要な時期を捉えている。＜シュトゥルム＞誌は文学、音楽、素描、木版画の領域でつねにより大きな意義へ向かって発展する能力を持つ新進の作品だけを掲載してきた。それゆえに、＜シュトゥルム＞誌は新しい時代の芸術の発展の全容を示している」<sup>28)</sup>と謳われていた。実際、早くも1912年にこの雑誌には前衛作家の作品が掲載されていたが、それとともに同時代の外国の作家、とくにフランスの作家がここに発表の場を得ていた。寄稿数の比較的多い作家の掲載には以下のものがあつた。

アポリネール：「カンディンスキー論」、「現代絵画論」、「アーチペンコ論」、「写実性・純粹絵画」、「詩・地帯」、(フランス語の)詩など。

サンドラール：(R・ブリュムナーの翻訳による)「アンリ・ルソー論」、「詩・マルク・シャガール」。

ラフォルク：(M・プロートの翻訳による)詩9篇。

マリネッティ：「未来派宣言」、「未来派第二宣言」、「未来派文学技術宣言」、「未来派文学技術宣言・補遺」。これらの宣言はすべてハンス・ヤーコブ(筆名ジャン=ジャック)の翻訳で掲載された。『未来派宣言』は1909年に『フィガロ』紙に発表されたが、この独訳は1912年に掲載された。ちなみに、H・ヤーコブは表現主義の作家であったが、早くからジャン=ジャックの筆名でフランス文学を数多く翻訳していた。

ランボー：(ジャン=ジャックの翻訳による)「未公開書簡」、(H・ホルヴァートの翻訳による)詩3篇。

リヴィエール：(各々ジャン=ジャックの翻訳による)「ボードレール論」、「セザンヌ論」、「ゴーギャン論」、「クロデル論」。

なお、1922年以降の『シュトゥルム』誌には、【資料2】に見られるように、チューリヒ=ダダの雑誌『ダダ』や(独仏両言語表記の)ケルン=ダダの雑誌『シャマーデ』にも寄稿して

いたアラゴン、ブルトン、エリュアール、リブモン＝デセーニュ、スーポー、ツァラの作品も掲載され、『シュトゥルム』誌がすでにダダイズムへ傾斜していたことを窺わせる。

b) 『アクツィオン』誌 (Die Aktion)

「自由のための政治・文学週刊誌」と銘打って 1911 年に創刊されたこの雑誌は、文学、芸術の面でも当初から前衛的で、外国の新しい文学にも強い関心を示していた。この雑誌の編集人兼発行人のプエムファートは翻訳を通じて近代フランス精神を紹介することに努め、バルザック、フロベール、ゾラなど 19 世紀の主要な作家に関する評論も掲載していた。こうした傾向から、1913 年発行の第 27 号、第 37 号は「フランスの最新の抒情詩」を特集した。ちなみに、第 37 号にはサンドラール、T・ドゥレーム、ドゥーベル、マリネッティのほか、今日ではほとんど忘れられた詩人の詩も収められていた。おもな寄稿者の掲載には以下のものがあつた。

ボードレール：(ハルデコップフやクレムなど表現主義の詩人の翻訳による) 詩 6 篇。

ジャム：(ヘーグナー、A・ビュヒャー、シュタードラーの翻訳による) 主要な散文作品。

マリネッティ：(H・ヘンドリヒの翻訳による) 詩 4 篇。

ペギー：(シュタードラーの翻訳による) 評論「共和国的英雄精神」のほか、(第一次大戦末期に G・シャインが翻訳した)「クレマンソー論」、「ルナン論」。

シュアレス：(Fr・プライや A・ビュヒャーの翻訳による)「スタンダール論」、「シェイクスピア論」、「ミュッセ論」などの作家論のほか、「ヴェネツィア論」などの文化論。

ヴェラーレン：(第一次大戦中の 1916 年にドイブラーが翻訳した) 詩 10 篇。

なお、『アクツィオン』誌におけるフランスの作家の掲載については少なくとも次の二つの特徴が見られた。まず、大戦中でも敵国フランスの作家を比較的多く紹介していたこと、次は、ライバル関係にあった『シュトゥルム』誌にあまり掲載されなかった作家をおもに紹介し、編集や内容の面でも『シュトゥルム』誌とは異なる独自性を発揮していた。

c) 『ノイエ・ブレッター』誌 (Neue Blätter)

1912 年の創刊以来、編集人がしばしば代わったが、第 1 巻 7 号から第 2 巻終号までは J・ヘーグナーが編集に当たった。彼は表現主義の作家と並べて保守的な作家も掲載したが、とくに同時代のフランスの文学、思想を自ら翻訳して紹介することに情熱を注いだ。

クローデル：(ヘーグナーの翻訳による)『お告げ』の抜粋、(プラハの表現主義の作家 P・アードラーの翻訳による) 詩。

ジャム：(ヘーグナーの翻訳による) 詩、散文、考察など 9 篇。

シュアレス：(ヘーグナーの翻訳による) 断篇、詩。

d) 『ヴァイセ・ブレッター』誌 (Die weissen Blätter)

1913 年の創刊以来、編集人の交替、2 回の休刊、4 回の発行所変更を経験したが、H・ヘッセが 1915 年初めに「全然、大衆的でなく、真剣に文学的な月刊誌が純粋な精神的運動を掲げて今や戦争の最中にその道を再開し得ることは、それだけで信頼を呼び起こすに足る一事件である」<sup>29)</sup>と述べたように、つねに大戦中の精神的状況を注視し続けた。それゆえに、1917 年にバルビュスの反戦小説『砲火』の抄訳を掲載したことは象徴的だったが、平和主義の啓蒙に努めるだけでなく、文学的にも価値のある掲載を貫いた。

ジャム：(シュタードラーの翻訳による)「祈り」の 14 篇の連詩、(ヘーグナーの翻訳による)『野うさぎ物語』。

ランボー：（Th・ドイプラーの翻訳による）『酩酊船』。

シュアレス：（H・バルの翻訳による）考察や評論の4篇。

ヴェラーレン：（L・シャルフの翻訳による）詩6篇。

ヴェルレーヌ：（Th・ドイプラーの翻訳による）詩6篇。

e) 『フォーラム』誌（**Das Forum**）

1914年4月の創刊時には、政治・文化のテーマを中心に詩や散文を収めた総合雑誌であったが、大戦勃発を機に諸国民の相互理解と反戦を訴えるようになり、ロマン・ロランと結びついた。それゆえに、1914年から1919年まではロランの平和主義と博愛精神を説いた論文が数多く掲載された。ちなみに、1915年1月11日号の「愛の記録集」の冒頭にはロランの「戦いを超えて」の断篇が掲載された。そして、ドイツ革命以後はH・バルビュスの「クラルテ」の運動を紹介する論文がおもに掲載された。

f) 『フリーデ』誌（**Der Friede**）

第一次大戦終結後二年ほど発行されたオーストリアのもっとも重要な政治雑誌であったが、党派性が強くなく、各号の末尾の「文芸欄」では（オーストリアの表現主義の作家E・A・ライnhルトの翻訳によって）同時代のフランス文学が紹介された。おもな掲載としては、ジャムの散文作品、アランの評論、クローデルの短篇が挙げられる。

g) 『ミュンヘン文芸誌』（**Münchener Blätter für Dichtung und Graphik**）

1919年からわずか一年間の発行であったが、表現主義の作家や画家も加わった協同的編集が行われたことから、新進の作品と並べて19世紀のフランス文学も紹介された。それゆえに、ボードレールの『悪の華』の抄訳やランボーの代表的な詩が（ともにA・クリスティアンの翻訳で）数多く紹介された。

雑誌以外に年報（Jahrbücher）、アンソロジー（Anthologie）、作品集（Sammelwerke）、年鑑（Almanach）にもフランスの作家の作品が数々収められたが、本稿ではそれらについては省略し、当時の代表的な叢書（Schriftenreihen）の『抒情詩のビラ』と『最新の日』におけるフランス文学の紹介状況を見てみたい。

叢書『抒情詩のビラ』（**Lyrische Flugblätter**）はA・R・マイヤーによって1907年から1923年まで発行されたが、おもに表現主義やヨーロッパの新進作家を文壇に登場させる目的を持っていた。フランス語圏の作家については、第19巻（1912年）にドゥーベルの『ほかのところで』がフランス語原文で、第24巻（1912年）にマリネッティの『未来派文学』がE・ハートヴィガーの翻訳で、第37巻（1913年）にアポリネールの『地帯』がFr・M・カーエンの翻訳で、第92巻（1921年）にヴェラーレンの『大都市は待ち伏せる』がL・シャルフの翻案で、第99巻（1922年）にヴェラーレンの『肉の市場』がL・シャルフの翻案で、第104巻（1923年）にヴェルレーヌの『女友達』がA・R・マイヤーの翻案で発行された。

叢書『最新の日』（**Der jüngste Tag**）は、当時の新しい文学の紹介に努めていた出版人K・ヴォルフによって1913年から1922年まで発行されたが、表現主義の文学を初め、ヨーロッパ、とくにフランスの文学を精力的に紹介していた。この叢書の発行目的と意義は、1913年秋に書かれた広告文に「この叢書はドイツの詩人に限定せず、外国の文学作品も刊行する。それによって、我々の時代のあらゆる国の文学に（造形芸術におけると同様に）共通する要素がいくつも存在することを示すことができるだろう」<sup>30)</sup>と謳われていたように、出版活動を通じてヨーロッ

パに共通する時代状況と精神的構図を示すことであった。

フランスからは、第9巻（1913年）にジャムの『恭順の祈り』がE・シュタードラーの翻訳で、第10巻（1913年）にバレスの『処女殺害』がH・ラウテンザックの翻訳で、第16巻（1914年）にシュウォブの『子供十字軍』がA・ザイフハルトの翻訳で、第43巻（1917年）にクロデルの『詩神たち』がFr・ブライの翻訳で、第58/59巻（1919年）にジャムの『楽園』がE・R・ラインハルトの翻訳でそれぞれ発行された。この企画で注目されるのは、各々の発行において作者と作品にもっとも精通した作家が翻訳を担当していたことである。

## V. 第一次世界大戦と独仏の文学者

戦争の勃発によって独仏の作家の間にも奇妙な戦いが生じた。まず、自国がドイツ軍に侵攻されたことに激怒したメーテルランクは「ドイツは国の端から端まで肉食獣であることを暴露した」と言い放った。これに対し、G・ハウプトマンはその非難をベルギーに転じて反駁し、「私はメーテルランクに、彼の＜文明国＞の行為をドイツでは誰も真似ようと思っていないことを断言する。我々は、敵の女や子供を神聖と見る野蛮なドイツ人であり、野蛮人に留まることを選ぶ。私は彼に、我々はベルギーの女や子供を卑怯に虐殺したり犠牲にしないことを確約することができる。（…）全員が一つの高貴で豊かな国宝のために、人類の進歩と向上に資する内的、外的な富のために十分な自覚をもって戦っている」<sup>31)</sup>と述べた。

次に、ロランは1914年8月29日に「ゲルハルト・ハウプトマンへの公開状」で「私はドイツを野蛮人扱いするフランス人に属してはいない。私は生涯にわたり両国民の精神を接近させるために尽力してきた。ヨーロッパ文化を破壊するために両国民を相戦わせる呪うべき戦争の凶暴さは私の精神を憎悪でまみれさせることなど決してできないだろう」と語り、ハウプトマンに対して「ドイツ人の身に跳ね返る戦争の罪惡に最後の力を振り絞って反対すること」<sup>32)</sup>を要請した。その数ヶ月後にTh・マンは論文「戦時随想」を『ノイエ・ルントschau』誌に発表し、その戦争を「文明に対抗するドイツ文化の戦い」と捉えて、軍国主義と暴力の弁解をした。戦争を支持する気運は多くの作家に高まり、キップリング、ダンヌンツィオ、デーメル、アンリ・ド・レニエなどが戦争を讃え、バレスやメーテルランクはドイツへの憎悪をまくし立てた。

1914年8月にドイツ軍がベルギーに侵攻するや否や、それまでドイツ人に好意的だったヴェラーレンもドイツ人憎悪を露わにした。彼は1914年10月24日にロランに宛て「私は悲しみと憎しみでいっぱいです。後者のほうの感情はこれまでに覚えたことのなかったものですが、今こそ知りました。私はこの感情をどうしても振り捨てることができません」と書き送った。それに対して、ロランは「憎悪してはいけません。憎悪はあなたのものではありません。我々のものではありません。我々の敵に対してよりも、憎悪に対して我々は身を守りましょう」<sup>33)</sup>と、彼を諭した。

ヴェラーレンが戦争を機にドイツ人憎悪を募らせたことによって、彼とSt・ツヴァイクの友情も終わることになった。ツヴァイクは1914年9月19日に『ベルリン日報』に苦渋に満ちた論文を送り、「フランス、ベルギー、イギリスの仲間たちよ、我々はしばし別れを告げねばならない。我々は今はじめて、せめて書かれた言葉で談話を交わすとしても、お互いを理解することもできなくなった。我々の抱く感情の中には我々の祖国の運命がつねに入り込んでいる。君

たちはもはや私とは無縁の人々なのだ」と述べた。これと同時にツヴァイクはロランに宛てて敵国の知識人を結集することはもはや手遅れであること、そしてヴェラーレン、メーテルランク、A・フランス、ハウプトマンたちはすでにあまりにも世論に巻き込まれており、平和よりも殲滅のほうを好むと推測される旨を伝えた<sup>34)</sup>。

このように、戦争を機にそれまで育んできた作家たちの友情が虚しく潰えた例はいくつも見られた。しかし、これとは反対に、互いに敵となった独仏の作家が苦悩と悲哀の極みを超えて敵の戦列にいる友人に呼びかける例も数々あった。以下では、独仏の作家が国家の敵対状況においても相互の理解を深め、友情を保ち続けようと努めた例を紹介したい。

#### a) エルンスト・シュタードラーとシャルル・ペギーの戦場での対峙

早くも1915年4月に戦争は行き詰まった状態だった。つまり、1914年秋には迅速な勝利をフランス戦線で収めることに自信を示していたドイツ軍が意外にも苦戦を強いられ、フランス軍の反撃に苦しんでいたのである。その頃、ドイツの『文学の反響』誌の「文学界消息欄」に次のような短い記事が載った。「戦死した二人の詩友、シュトラースブルクのドイツ文学者エルンスト・シュタードラーと、シュタードラーによって翻訳されたフランスの詩人シャルル・ペギーとは、今、シュタードラーの遺稿から判ったことだが、睨み合っている塹壕内で直に対峙していた。案の定、その親しい敵同士は互いに気づき、紙片に思いを書いて交換し合った。シュタードラーの呼びかけは＜我が親愛なる同士、同輩よ…＞（Mon cher collègue et confrère....）で始まったが、シュタードラーの意図が分からなかったペギーは＜我が友よ、貴兄の言、解し難し、されど我、貴兄を愛す＞（Mon ami, je ne vous comprends pas, mais je vous aime）と紙片に書いたのであった」<sup>35)</sup>。

アルザス人シュタードラーとフランス人ペギーのいささか臆した紙片交換、とりわけ当惑気味に発せられた「貴兄」（vous）には敵対する兄弟（die feindlichen Brüder）特有の辛苦が滲んでいた。この二人の姿には独仏両国民の心に潜む共同意識（das Gemeinsame）と抵抗感情（das Widerstrebende）とが両面価値的に反映されていた。

ペギーの戦死をフェムファートは直ちに『アクツィオン』誌・第4巻で報じ、続く次号で追悼文を掲載した。さらに、この翌年にはFr・ブライが『時代=反響』誌・第2巻（1915/1916年）に「ペギーを追悼する文」を掲載した。しかし、戦争の最中に敵国の詩人を追悼し、讀えた両誌の行為は、たいそう勇気を要することであった、

#### b) ポール・エリュアールとマックス・エルンストの友情

エリュアールは詩論「詩の明証性」で、後年、親交を深めることになったマックス・エルンストとの出会いを次のように語っていた。「1917年2月、シュルレアリスムの画家マックス・エルンストと私は、前線のわずか1キロの距離を隔てた所に互いに位置していた。ドイツ軍の砲兵であるマックス・エルンストは、フランス軍の歩兵である私が歩哨に立っている塹壕へ砲弾を撃ち込んでいた。3年後、わたしたちはこの世でもっとも親しい友人となり、以来、人間の全的な解放という共通の大義のために情熱を傾けて共に戦っている。（…）ただ戦争中は、互いに歩み寄ることもわたしたちの共通の敵である＜利潤のインターナショナル＞に抗して自発的に、また熱烈に手を差し延べ合うこともわたしたちには不可能だった」<sup>36)</sup>。

よく知られているように、戦後M・エルンストはエリュアールの詩集『反復』（1922年）、『不死の死』（1924年）、『沈黙にかえて』（1926年）、『人生の下部または人間のピラミッド』（1926年）などに挿絵や肖像画を描き、エリュアールとの共同創作に励んだ。

## c) リルケを救った St・ツヴァイクとロマン・ロランの連携

独仏の作家の友好と敵対が複雑に交錯する状況にあって彼らが共通の友人の窮状を救うために連携する例も見られた。

大戦中にリルケに再会した St・ツヴァイクは、「哀れなほど不器用に」軍服を纏ったリルケから、彼がパリのアパートに残した家具、美術品、書籍などが家賃未払いの口実のもとに競売に付されたことを聞いた。ツヴァイクはその「精神的財産」の救出のために早速スイスにいたロランに手紙を書き、ロランはパリのジッドに書籍の回収を依頼した。最終的にリルケの手に戻ったのは、管理人によって救い出された紙片と原稿入りのトランクだけだったが、大戦中にツヴァイクとロランが行った連携は友情の真価を示した実例として知られている。

## d) テーオドア・ドイプラーによるフランス詩集『おんどり』の編集・発行

大戦の最中の 1917 年 4 月、反戦的態度が顕著だった「アクツィオン」(Die Aktion) 出版社からフランスを象徴する『おんどり』(Der Hahn) の表題でフランス詩集が発行された。そこにはドイプラーが編集・翻訳したユゴー、ルネ・ギル、ベランジェ、タイヤード、ラマルチーヌ、ランボー、ヴェラーレンなどの詩が収められていた。また、表紙絵はフェーリクス・ミュラーの作品だったが、訳詩の間にはオノレ・ドーミエ、ラ・フレネー、アンドレ・ドランなどの素描や木版画が豊富に配されていた。

## e) マルセル・マルティネとカール・オッテンの詩的呼びかけ

マルティネ (1887-1944) はレオン・ドゥーベルなどの孤独な詩人から革命的な労働運動指導者まで幅広い交友関係を持ち、ロランの影響のもとに左翼的人道主義の作家として国際的に活動していた。戦争の大量殺戮への怒りを詠った彼の代表的詩集『呪われし時代』は大戦中の 1917 年に発行され、独仏の反戦運動に大きな影響を及ぼした。その詩集に収められた有名な詩「ドイツの詩人たち、おお未知の兄弟たちよ」は同年に『ヴァイセ・ブレッター』誌にもフランス語原文で掲載され、表現主義の詩人たちに深い感銘を与えた。「ドイツの若者よ、前進せよ、生へ向かって前進せよ／墓を越えて前進せよ！／僕たちはふたたび聞く、ゲーテの言葉を。／だが、より虚ろで、より悲痛な音調で！／それは怒りの叫び、だが、愛の叫び。／それはたとえ固くつぐんだ口から発せられようとも、僕たちの心をさらに激しく燃え立たるのだ」<sup>37)</sup>。

マルティネのこの呼びかけに対して、国際的な反戦活動を通じて彼と親交があったカール・オッテン (1889-1963) は「マルティネへ」と題する七部構成の長詩を書き、次のように返答をした。「兄弟よ、殺人で毒され、酸に腐食した僕の心にきみが呼びかける声が響いた。／僕は見る、痩せて青白い顔をした背の高いきみが、口を開けたまま遠くから手を振る姿を。／…／きみは僕たちに何かを叫んでいる、僕には分かっているよ、分かっているとも！／僕たちの誰にも分かっているよ、分かっているとも！／…／おお、羞恥、後悔、罪！／きみ、離れがたい僕たちの親友、きみたちは僕たちにつながれている、僕たちはきみたちにつながれている！(wir an euch gekettet)／…／きみは僕の手を握りしめる、僕はきみを認めよう！／僕はみなにきみのことを話した、きみが活着していることを、もう敵対関係はないことを。／…／おお、兄弟の手 (Bruderhand) よ、道を指し示しておくれ、／そしたら、僕はようやくきみを見出すだろう。／おお、兄弟の目 (Bruderauge) よ、夜の闇を穿ておくれ、／僕の行く道を照らしておくれ、／おお、兄弟の心臓 (Bruderherz) よ、時機の到来を、和解の時機の到来を打ち鳴らしておくれ、／…／兄弟マルティネよ、僕はきみに言う、僕たちはみな同じことを望んでいる。」<sup>38)</sup>

このオッテンの返歌では、マルティネが「兄弟」と呼びかけられ、「きみ」(du) と「僕」(ich) は真情が呼応するなかでやがて一体化し、「僕たち」(Wir) と主張されるに至っている。独仏の詩人の「僕たち」の認識こそ大戦中に彼らが求め続けた希望に他ならなかった。この詩はゴルによってフランス語に訳され、1918年に『ドゥマン』誌に、そして1919年に『ル・アンブル』誌に掲載された。

#### f) 大戦中のスイスにおける独仏の文学活動

大戦勃発後、数年間、ロランはジュネーヴで国際赤十字社の仕事に携わりながら、戦争に抗する各国の知識人の行動を見守り続けた。そして、St・ツヴァイクも1917年11月から大戦終結までチューリヒで暮らした。当時のスイスは、各国の作家、芸術家、知識人が徴兵や軍国主義的弾圧を逃れて移り住んでいたが、さらにドイツとフランスで発行禁止になった本や雑誌を世に送り出そうとする出版人も集まり、まさにヨーロッパの平和主義者の活動拠点となっていた。たとえば、『ヴァイセ・ブレッター』誌は1916年4月から1918年12月までチューリヒのマックス・ラッシャー出版社を発行所としていたが、その間の1917年にその雑誌にはバルビュスの『砲火』の一部がチューリヒ在住のH・バルの翻訳で掲載された<sup>39)</sup>。

このほか、M・ラッシャー出版社は戦争中にゴル、エーレンシュタイン、L・フランク、シッケレ、St・ツヴァイクなどドイツ表現主義の作家の作品やフランスの反戦的作品のドイツ語版を出版した。たとえば、1917年にはゴルの『ヨーロッパの戦死者へのミサ・反戦パンフ』(フランス語)、1918年にはSt・ツヴァイクの『ヨーロッパの心』(フランス語)、1919年には(F・ベランの翻訳による)マルティネの『呪われし時代』や(ハルデコップフの翻訳による)デュアメル『殉難者列伝』がこの出版社から発行された。

また、ジュネーヴには『ドゥマン』誌、『タブレット』誌、『フーイユ』誌が発行されていた。『ドゥマン』誌はグラフィックとともにロラン、デーメル、タゴールの文学作品やギルボウ、トロツキーの政治論文を掲載したが、つねに同時代のドイツの文学界に関心を抱いていたので、表現主義の紹介として、ハーゼンクレヴァーの「ジョレス」詩二篇のほかヴェルフエル、ベッヒャーの詩の仏訳も掲載した。『タブレット』誌はわずか二年の発行に終わったが、ロラン、エーレンシュタイン、ギルボウ、ジューヴが協力していた。『フーイユ』誌はSt・ツヴァイクの親友で版画家のフラン・マズレールとジューヴをおもな寄稿者にして、反戦的で前衛的な「日報」の役割を果たしていた。ジュネーヴにはこれらの雑誌のほかに、マズレールがアルコスと共に設立したサブリエ出版社があり、彼ら二人の作品のほか、ロラン、デュアメル、ヴィルドラック、ジューヴ、ヴェラーレンなど、おもにアベイ派の作品を出版し、後に文学者のヨーロッパ規模のアンガージュマンを生み出す基盤を形成した。

以上で見たように、ドイツ表現主義におけるフランス文学の受容は、19世紀までの様相と大きくは相違せず、各作家の憧憬と関心に基づいて文学作品の翻訳や翻案が盛んに行われ、それがフランス文化紹介の主導となっていたが、そうした関係全般でとくに重要な役割を果たしたのは、アルザス＝ロレーヌの作家たちであった。O・フラーケ(1880-1963)、E・シュタードラー(1883-1914)、シッケレ(1883-1940)、E・R・クルツィウス(1886-1956)、H・アルブ(1887-1966)、I・ゴル(1891-1950)などの作家や文学者は独仏の狭間で変転を繰り返したアルザス＝ロレーヌ固有の歴史を背景に、つねに独仏間の相互理解、協調の進展を願って活動していた。彼らは、フランス文学の独訳や紹介、ドイツ文学の仏訳や紹介に留まらず、独仏の国



家政策や歴史的事件についても公平に論評した。たとえば、フランス系住民の虐待、負傷を惹き起こした 1913 年のツァーベルン（サベルヌ）事件ではシッケレやシュタードラーが『アルザス評論』誌でドイツ政府に抗議し、フランス軍がライン地方を占領した 1922 年のバレス政策では仏文研究者のクルツィウスがフランス政府を糾した。（独仏の文学史で<シュトラースブルク文学集団>と称される）アルザス＝ロレーヌの表現主義の作家たちの役割、活動については、紙幅の都合により本稿では取り上げることができなかったが、ドイツ表現主義とフランス文学の関係において彼らが果たした大きな役割を忘れることはできない。

ドイツ表現主義のフランス文学受容は、おもに作家たちの多彩な精神的布置によってやがて独仏の文化の相互交換（Austausch）と作家の共同活動（Mitarbeit）へと発展し、表現主義が汎ヨーロッパ的特徴を得る契機にもなった。

Th・マンはクロードルの『マリアへのお告げ』の中の「あなたは一気に天まで翔け昇って行くがよい！それに引き換え、私はほんの少し昇るためにも、一つの聖堂を築き、深い基礎工事までしなければならない」という台詞に真の愛すべき優しいフランスを見出した感動を語ったが、その根底には独仏の長い歴史から体得された次のような確信が息衝いていた。「フランスとドイツ、この両国はかつて時間の胎内においてはひとつであった。その後、互いの歩む人生行路が別れ、死ぬほど憎しみ合うようになったにすぎない。共通の芸術的・形而上学的財産が両国を結びつけている。この所有権をどちらか一国だけに与えることはできない。…確かにこの作品への愛は何よりも先ず、大昔からの友愛に、いや兄弟のような親密さどころか一体性（Einheit）に気づくことの歓びである」<sup>40)</sup>と。この意識の再確認こそが独仏の文学交流でも求め続けられた希望であったと言える。

## 註

1) ゲオルゲはフランス語による詩作について「外国の言語素材で詩作することには必然性がある。外国語の詩を読んで感動を受け、何ものかを感じ取り、何ごとかを考える——そのもとのものは、詩人にとっては母国語の場合と同じように音響がある。詩作品そのものから受ける刺激だけではなく、実際にパリとブリュッセルに長期滞在していた間の日常生活でのフランス語ばかりの使用も、この原因と見なさねばならない」（Stefan George: Gesammelte Ausgabe, Bd.3, S.127.）と述べていた。

2) ベンは 1914 年から 1917 年までアントワープとブリュッセルの兵站基地で軍医中尉として勤務した。

3) Walther, Ingo F. (Hrsg.): Paris—Berlin 1900-1933. München (Prestel-Verlag) 1979, S. 437.

なお、フランスにおけるこの傾向の原因として、ルキ・レイノオ（佐藤輝夫訳）：『近代仏蘭西に及ぼしたる独逸の影響』（理想社、1941 年）380 頁では、普仏戦争敗北後の国粹化以外に、1900 年のニーチェ受容を挙げている。つまり、自国ドイツの文化を痛烈に批判したニーチェの著作が紹介されたことによって、それ以前のフランスのドイツ文化崇拝が大幅に減退したと捉えられている。

4) 『パーン』誌を財政的に支えていた H・ケスラー伯(1868-1937)はドイツとフランスの芸術家を分け隔てなく支援したので、その雑誌は世紀転換期の独仏の文化交流で架橋的役割を果たした。実際、この雑誌では独仏の多くの画家が協力したが、文学でもユイスマンスとパニッツァが、モルゲンシュテルンとメーテルランクが、ピエール・ルイスとホーフマンスタールが出会い、協力した。また、この雑誌には 1895 年に「文学試論」（L'Epreuve litteraire）と題する付録が加わったが、そこにはフランスの作家の未発表作品や、『パーン』誌に掲載されたドイツ語著作のフランス語訳が掲載され、全文がフランス語記述であった。ちなみに、付録の第 3 号には 19 歳の作家レオン＝ポール・フェルグの処女作品『タンクレード』が掲載された。この付録の発行ではニーチェの翻訳者で、『パーン』誌のパリ通信員であった

H・アルベールが主導的役割を果たした。そして、この事情からアルベールとデーメルの間には1895年以降、頻繁に文通が行われ、その書簡はのちにドイツで出版され、当時の独仏の文学者交流の記録として意義をもった。

5) 1913年3月17日にその五人の会合がパリで実現した。その時、彼らは共同で一枚の葉書をインゼル出版社のキッペンベルクに書き送った。

6) 短編小説、評論、戯曲など多彩な創作をしたが、『アメシスト』、『オパール』、『ヒューペリオン』、『デア・ローゼ・フォーゲル』などの雑誌の発行も行った。短命に終わったが芸術的価値を有した『アメシスト』、『オパール』の両誌では（ヴィヨン、ヴェルレーヌ、コルビエール、クロードルなど）フランスの詩人の作品を彼自身やK・L・アマーの訳で掲載した。そして、1909年には自らジッドの『鎖を離れたプロメテ』とクロードルの『交換』を翻訳したが、とりわけジッドの作品の翻訳が多く、ドイツ語圏ではジッドの紹介者としても知られた。

7) Wellershoff, Dieter (Hrsg.): Gottfried Benn. Gesammelte Werke in vier Bänden, Bd. 4. Wiesbaden 1961, S. 63 f.

ちなみに、ニーチェはスタンダールについては『赤と黒』も読んでいた。そして、スタンダールの「エゴティズム」に共感し、スタンダールを自分の暴露心理学に通じる作家と捉え、最晩年の自伝では「1880年代にスタンダールに出会ったことを生涯のもっとも美しい偶然の一つ」と記していた。しかし、フロベールには「生を憎悪する」デカダンスを感じ取り、フロベールの「無私」と「非利己」の特徴を批判していた。ちなみに、ニーチェは哲学者ではモンテーニュ、ヴォルテール、テヌを好み、作家ではラ・ロシュフコー、バルザックを好んだ。さらに、同時代の好きなフランス作家としてはP・ブールジュ、P・ロティ、ジップ、メイヤック、A・フランス、ルメートル、スタンダール、メリメ、モーパッサンを挙げ、「今のパリにおけるほど、これほど好奇心に満ち、また同時に繊細な心理学者たちが一度に揃えられる時代は他にあるだろうか」と感嘆していた。Vgl. Oei, Bernd: Nietzsche unter deutschen Literaten. Baden-Baden 2008, S. 50 f.

8) ハイムはゲオルゲを「ビンゲンの粘土の仏塔」と言った。そして、シュタードラーはゲオルゲの詩学について「あたかも自由意志、自我の自由発展を諦めることによって、つまり高貴な模範、堅固な形式に適応し、意識的に順応することによって詩文化を創り上げ得るかのような危うい思い込みへ進むことになった。生を育む肥沃土をますます失ったそうした文学にはもはや奮闘したり渴望したりすることもない。選り好みし、排他的になり、ますます死んだ形式へと硬直するそのような文学に対して、今日、ドイツでは形式主義の拘束の輪を打ち破り、文学をふたたび体験へと導き、現実的内容で満たす試みがされねばならない。少なくともドイツの詩にとっては今日、形式に填らぬ点が幸いとなっている。贅沢な器、素晴らしいが模倣するうちに無価値になってしまった形式は、新しい体験内容を表現するためにふたたび打ち破られねばならない」と批判した。Vgl. Stadler, Ernst: Dichtungen Schriften Briefe. München 1983, S. 427 f.

9) 内訳は、ヴェルレーヌ：『サチュルニヤン詩集』（2篇）、『艶なるうたげ』（6篇）、『言葉なき恋歌』（9篇）、『叡智』（3篇）／マラルメ：『エロディヤード』ほか詩2篇／ランボー：『母音』、『谷間に眠る人』、『半獣神の頭』など／ドゥ・レニエ：『翌日』、『古風でロマネスクな詩』、『夢の中でのように』など。

なお、Kayser, Wolfgang (Hrsg.): Gedichte des französischen Symbolismus in deutschen Übersetzungen. Tübingen 1955では各フランス詩に対応して複数の独訳が紹介され、ドイツの詩人(=翻訳者)のフランス詩への高い関心を窺い知ることができる。

10) Heym, Georg: Dichtungen und Schriften, Bd. 3. Heinrich Ellermann Verlag 1960, S. 149.

11) ibid. S. 147.

12) Heym, Georg: Dichtungen und Schriften, Bd. 1, S. 227.

13) Heym, Georg: Dichtungen und Schriften, Bd. 3, S. 138 f.

14) Becher, J・R: Gesammelte Werke, Bd. 1. Berlin u. Weimar 1966, S. 73.

15) K・L・アマーはランボーのほかメーテルランクやヴィヨンの翻訳も行った。ヴィヨンの翻訳についてはブレヒトにもっとも優れた独訳と評された。Vgl. Walther, Inge F.: op. cit. S. 452

- 16) Böschstein, Bernhard: Wirkungen des französischen Symbolismus auf die deutsche Lyrik der Jahrhundertwende. S.386-387. そして、滝田夏樹：『表現主義の詩人たち』（同学社、1990年）の第6および第7章でもランボーのトラークルへの影響が詳しく考察されている。

なお、トラークルの場合、「カスパー・ハウザー」のモチーフに見られるように、ヴェルレーヌの影響も窺われた。

- 17) Wolfenstein, Alfred: Werke, Bd. 5. Mainz 1982, S. 311.  
 18) フーゴ・バル（土肥義夫、近藤公一訳）：『時代からの逃走』（みすず書房、1972年）130頁参照。  
 19) Zweig, Stefan: „Das neue Pathos“. In: Raabe, Paul (Hrsg.): Expressionismus— Der Kampf um eine literarische Bewegung. Zürich 1987, S. 19.  
 20) ヴィリ・ハース（原田義人訳）：『文学的回想』（紀伊国屋書店、1959年）42頁参照。  
 21) 『マリアへのお告げ』は1892年に書かれた『乙女ヴィオレーヌ』が改題、改作され、1911年に成立したものだが、聖霊によって懐胎する旨がマリアに告知される聖書の有名な物語が篤信のクローデルを劇作へと促した。

Th・マンの記録には「クローデルの『告知』の上演を見る。これはヘーグナーが翻訳し、舞台をドイツ中世の世界に移している。この上演の観客の中にはリルケ、M・ラインハルト、M・ブーバーもいた」と記されていた。そして、リルケはその上演の感想をトゥルン・ウント・タクシス夫人に「その劇は興味をそそるものが多くあります。多くを思考させ、願望させ、理解させ、受容させます。自由があるというよりも、むしろ意図があるからです」と（フランス語で）書き送っていた。（Mendelssohn, Peter de: Hellerau—Mein unverlierbares Europa. Dresden 1993, S. 84. 参照）

- 22) フーゴ・バル：上掲書 11頁。  
 23) 三浦安子：『エルンスト・シュタードラーの抒情詩』（同学社、2000年）41-48頁によれば、シュタードラーの詩「ロンドンのユダヤ人街」はジャムの詩「アムステルダム」から詩的内容、描写の面でいくらか影響を受けているとされる。  
 24) „Aus Briefen Léon Deubels an Alfred Richard Meyer“, in: Bücherei Maiandros (Kraus Reprint 1969) S. 45.  
 25) 1912年から1913年9月まで隔月発行されたが、文学と美術の新進の作品紹介に努め、1900年創刊のペギーの『半月手帳』誌を模範にしていたといわれる。  
 26) 高田博厚：『分水嶺』（岩波書店 2000年）では、Ⅷ章「呪われた詩人」で当時のドゥーベルの窮状が詳しく記されているが、以下にドゥーベルの生と作品について簡単に紹介したい。

ドゥーベルは1879年にベルフォールで生まれたが、彼の生活は早くも子供の頃から孤独に苦しみ、悲哀に満ちていた。つまり、彼の両親はほとんど彼の世話をしなかったため、彼は叔父に引き取られ、叔父に育てられた。しかし、その叔父もやがて仕事に忙殺され、ドゥーベルの世話ができなくなったために、彼の養育は他人に委ねられた。彼らはドゥーベルの繊細な感情や習慣を理解することができず、彼が必要とする細やかな配慮を与えなかった。11歳から17歳までギムナジウムに通っていた間、ヴェルレーヌやラフォルクを熱烈に崇拜し、詩に強い関心を持った。後のパリ時代にも友人の前でヴェルレーヌやラフォルクの詩の朗読をした彼は、自らの詩作でこれらの詩人から強い影響を受けた。ドゥーベルは大学入学資格を取得した後、官立中高等学校の自習室監督教師になったが、生徒たちから敬愛されたものの、教員団と衝突し、解任された。その後、1900年に無一文の状態で行き、あの『道と敗走の歌』の数篇の詩に詠われたような、つまり「主よ、僕にはパンも夢も寝泊まりする所もない」と悲嘆にくれる極貧の生活をした。その後、歩兵連隊に入営したが、その頃、相続した遺産のおかげで、しばらくは大して苦勞もなく暮らすことができた。除隊した後、イタリアへ行き、1903年に出版されることになった『誕生の光』の構想を持って帰った。その後、友人ベルギーのもとに二度ほど滞在したが、再度、パリへ行き、極貧のなかで詩への情熱を持ち続け、少数の友人の支援を受けて暮らした。象徴主義の詩人たちから影響を受け、感受性の極めて強いこの詩人にとって唯一の関心事はつねに詩であった。

1913年以前に彼が発表した作品は、『口ごもれる歌』（1899年）、（『道と敗走の歌』1901年、『内面のソネット』1903年、『記憶の覚醒』を収めた）詩集『詩・人生』（1904年）、『イタリアのソネット』（1904年）、『誕生の光』（1904年）、『詩集』（1906年）、『選詩集』（1909年）、『樹木と薔薇』（1909年、未刊）、『ほかのどこ

ろで』（1912年）などであったが、そのほとんどは発見することが困難であった。彼の死後、1913年に友人ペルギーはドゥーベルの詩の成果を詩集『君臨する』にまとめた。

ドゥーベルをよく知り、彼の死後「レオン・ドゥーベル友の会」会長としてドゥーベルの作品集や書簡集の出版に尽力し、作品集に「序文」を書いた作家のジョルジュ・デュアメルはドゥーベルのパリ時代の極貧生活を伝えたあと、彼のマルヌ川への投身自殺について「困窮きわまって、生き損じた（verfehlte）と自ら断じた人生の当然の結末」と語り、「ドゥーベルは34歳で自殺したのであり、彼の死は（ヴェルテルやチャートンなど）若い狂人たちの死と較べるわけにもいかない。また、文学の毒に当たって乱痴気騒ぎの末に自殺する若者たちの小説じみた行為に較べるわけにもいかない。ドゥーベルが自分は死ななくてはならないと判断したときの年齢ともなれば、人それぞれに人生について分別代わりの役をする情報を持ち合わせているものだ。だから、事前に長く考え抜いた後でなくては、自殺したりはしない」と述べた。

困窮の極みにあっても、ヴェルレーヌやボードレール、マラルメの詩を朗読するときは「誰も彼以上に繊細に、また熱気ある知性を込めて詩を読むことはできない」と周囲に思わせるほど、気高い姿を示したドゥーベルは、デュアメルをして「日々の生活にあれほどの痛手を受けなかったら、あれほど暗澹とした思いに駆られなかったら、彼の仲間たちが達した年齢まで生き延びたとしたら、ボードレールやマラルメが君臨している段階からほど遠からぬ、荣誉ある地位を得ることができたはずである」と語らせた数奇な運命の詩人だった。

27) René Schickele: Voltaire und seine Zeit. Berlin, H・Seemann Verlag 1905.

28) Raabe, Paul: Die Zeitschriften und Sammlungen des literarischen Expressionismus. Stuttgart 1964, S. 26.

29) Hesse, Hermann: „Neue Zürcher Zeitung“ 26. 2. 1915.

30) Raabe, Paul: op. cit. S. 172.

なお、K・ヴォルフ社の年鑑『ダス・ブンテ・ブーフ』（1914年）にも（同社が1913年までに作品出版した）ボードレール、ジャム、ロダン、シュアレス、ヴォルテール、ゾラなどの作品が収められていた。

31) Hauptmann, Gerhart: Gegen Unwahrheiten. In : H・Kellermann (Hrsg.): Der Krieg der Geister. S. 436-440.

32) Vgl. ibid. S. 440-449. なお、ロマン・ロラン（宮本他訳）：『ロマン・ロラン全集 18』（みすず書房、1964年）11頁参照。

33) ロマン・ロラン（片山他訳）：『ロマン・ロラン全集 26』（みすず書房、1963年）133頁参照。

34) ロマン・ロラン（片山他訳）：上掲書 124頁参照。

35) „Nachrichten“ in : Das literarische Echo. Jg.17, H.14 (15. April, 1915)

36) ポール・エリュアール（宇佐美斉訳）：『エリュアール詩集』（小沢書店、1994年）140頁参照。

37) Rubiner, Ludwig (Hrsg.): Kameraden der Menschheit. Stuttgart 1979, S. 12.

38) Pinthus, Kurt (Hrsg.): Menschheitsdämmerung. Hamburg 1955, S. 240 f.

39) フーゴ・バル：上掲書 199頁参照。チューリヒ在住のバルの所ヘシッケレから『ヴァイセ・ブレッター』誌に翻訳を寄稿するようにとの申請で、バルビュスの『砲火』の終章「黎明」が送られてきたという。

40) Mann, Thomas: Betrachtungen eines Unpolitischen. Frankfurt a. M. 1988, S.397.

この箇所ではTh・マンは登場人物の名前に関して、自己の良心に従う敬虔な（仏語版）アンヌ・ヴェルコールが（独語版）アンドレアス・グレートヘルツに、聖堂建築技師のピエール・ド・クラオンがペーター・フォン・ウルムにそれぞれ自由に（zwanglos）変えられているヘーゲナーの優れた翻訳にも注目を促している。